

「また違う道へ」

聖書とは「聖なることが書かれている本」ではありません。そうではなくて、神様の御前にあって、どうしようもなく不完全で、でも一生懸命に生き抜いてきた人達のことが記録されている本です。「人の生き様を赤裸々にした本」だと言えます。もちろん、それは聖書の、ある一面に注目した捉え方です。聖なることが書かれている部分もあります。でも、今日は「人の生き様を赤裸々に書いた本」というつもりで、創世記 21 章の「お家騒動物語」を読んで参りたいと思います。

まず前提として、今日の物語に至るまでの、アブラハム、サラ、ハガルの関係性について振り返ってみます。もともと、サラは長く子を成すことができず悩み抜いた女性でした。そこで、サラは、自分の女奴隷であるハガルに、自分に代わって夫アブラハムの子を成すようにと命じます。語弊を恐れずに言えば、現代の代理出産的な目論見ですね。かなり乱暴で、非倫理的ではありますが、当時としては、そういう形で子を得ることもあったということです。そして、その目論見は、一応成功します。ハガルは、アブラハムの子を身籠ることになりました。ただ、日に日にお腹が大きくなるハガルは、次第にサラに対して「軽んじる態度」を取るようになりました。そこで、サラは夫アブラハムの許しを得た上で、妊娠中の女奴隷ハガルを追い出してしまいます。実は、ハガルさん、今日の聖書箇所以前に、すでに一度追い出されているんですね。

家を追い出されたハガルは、その道中で、神様の御使いと出会います。御使いは、つらくてもサラのもとに戻ることを、お腹の子にイシュマエルという名を付けることを伝えました。ハガルは、御使いの言う通りに、サラのもとに戻り、無事にイシュマエルを出産しました。そして、14～15 年経った後、すでに超高齢者となったアブラハムとサラとの間にも、奇跡的に息子イサクが与えら

れます。それは、非常に祝福に満ちた喜ばしい出来事として聖書には報告されています。しかし、その喜びの色が濃ければ濃いほど、輝きが強ければ強いほど、深く悲しい影を落とすのは、私たちも良く知る、よくあるお話です。

サラも、ハガルも、自らの息子を与えられました。でも、それでハッピーエンドとはなりません。15 歳ほど離れた兄イシュマエルが、弟イサクをからかっている場面から、今日の聖書箇所は始まります。この「からかう」という言葉は、かなり広い意味が読み取れるもので、極端な解釈では、「弄ぶ」とか「性的虐待」という意味を拾うことができますし、最も穏やかな解釈だと、ただ単にイシュマエルは小さな弟イサクを「あやしていた」だけ、とも読み取ることができます。いずれにしても、今日のこの聖書箇所において、重要なのは、年老いてやっとのことで得られたイサクを深く溺愛するサラにとって、この異母兄弟の関係性がどう見えていたか、という非常に主観的な視点です。ここまでの展開をおさらいすると、このサラという女性は、とても一生懸命に、あるいは激しく妻として、母としての役割をこなそうとする熱情家のきらひがあります。そのことを踏まえると、族長アブラハムの正妻として子を成し、その正統後継者たる我が子イサクに、少しの不名誉や不利益を与えてはならないという思いがあったことは、想像できます。それは、女奴隷ハガルの子イシュマエルが、イサクに対して、どう振る舞うか、どう接するかという行動如何以前のお話で、イシュマエルという存在自体が疎ましいと感じられたということです。

そんな子を思う母の熱情がもたらしたのが、今日の物語です。「あの女とあの子を追い出してください。あの女の息子は、わたしの子イサクと同じ跡継ぎとなるべきではありません」と。アブラハム一家、これで2回目のお家騒動です。そもそも1回目の時も、そうだったのですが、こういうサラの要求に対して、族長であるアブラハムは、不思議なくらいに無抵抗なんですよ。家の長として、夫として、父として、アブラハムは、その存在感と権力を全くと良いほど発揮していません。

熱情家の妻であり母であるサラが、その愛のゆえに過激な要求を厭わない一方で、夫であり父であるアブラハムは、ここぞという時に悩むしかないという。それもまた現実的な人間模様の一場面なのかも知れません。聖書は、サラの激情とアブラハムの弱さを、隠さず報告しているわけです。

さて、サラに頭の上がないアブラハムは、神様の助言を受けて、希望と苦渋を綯い交ぜにした決断を下します。12 節から 13 節において、神様はアブラハムに対して、「妻サラの言う通りにして良いこと」「アブラハムの血筋はイサクによって受け継がれていくこと」そして「ハガルの子イシュマエルも国の創始者になること」を約束されました。それは、アブラハムにとって、有り難いことであると同時に、ハガルとイシュマエルを追放しなければならないという点で大賛成できるものではありませんでした。ゆえに希望はあれ、苦渋の決断だったということです。アブラハムは、朝早くにハガルとイシュマエルを自分の家から送り出しました。もっとも正確には、「ハガルにイシュマエルを連れ去らせた」と書かれているので、その実状というのは、もっと不誠実で不条理に満ちたものだったのかも知れません。これも、また偽れぬ人の弱さ、綻び、歪みの表出と言えるかも知れません。

さて、今回の物語は、ハガルにとって 2 度目の逃避行です。ただし、前回と異なるのは、すでに成長した息子が共にいること。そして、その息子の死を目の当たりにしないといけない、ということです。先ほどもサラッと触れましたけど、聖書の記述に従って計算してみると、この時、息子イシュマエルは 15 歳でした。意外に成長した少年、もしくは青年と言っても良いかも知れない年齢です。そして、この事実は、この母子の放浪の旅が、どれだけ過酷であったかを示唆するものであります。つまり、なかなか大きな、かつ思春期な息子と、その母親の間で、道中「喧嘩は無かったのか」ということです。多分、バチバチに言い争っていたんじゃないでしょうか。「なんで父さんの家から出ていかないといけないんだ!」「いや、だって、あの女と息子がいたら、私たちに幸

せなんてないでしょ！」とかなんとか、そういう感じの、ですね。

そして、いよいよという時がきます。中学生、高校生くらいの息子が、もう歩けない、動けないと言っている。おそらく口喧嘩もしたであろう我が子が、今は動くこともできず、横になるしかないほどに衰弱している。本当にドラマ仕立てなら、ここで母親は、子どもに寄り添い、抱き寄せながら、その最後を見取るのかも知れない。けれど、ハガルは、ここで距離を取るんですね。これは、同じ親として、かなり不可思議な行動ではあります。でも、数多くの困難を経た先で息子の死に向き合う心境には、私の日常的な感覚は通用しないのかも知れません。目の当たりにしたくない、認めたくない、でも、目を逸らすことはできない。だから、「矢の届くほど離れ、子供の方を向いて座り込んだ」という、妙にリアルな風景描写が記されています。そして、息子イシュマエルも泣いているし、母ハガルも泣いているしという、言葉が介在しない涙だけが流れる絶望の様子が報告されています。これがまた妙にリアルだったりもします。大人も子どもも泣いている状況って、実際に起こると、かなり深刻ですよ。

と、ここまで事態が進捗して、落ち込んで、底打ちして、ようやくです。ようやく、神様の御登場です。言い方悪いですけど、でも、事実、そういう風に物語は展開していきます。17 節 18 節には「神は子供の泣き声を聞かれ、天から神の御使いがハガルに呼びかけて言った」と書かれています。これもこれで不思議な話で、いやいや、神様、子供の泣き声を聞いたなら、じゃあ泣いているイシュマエルさんのところに行けばいいじゃないですか、と思えてしまいます。しかし、これもこれで、まあまあリアルな話で、15 歳の子どもの主導権、管理権は、まだまだ親にあるという理解なんですよ。ユダヤ教における成人は 12~13 歳なんですけど、実際には、15 歳になっても、親の管理下にあって然るべきという社会の了解が反映されているのかも知れません。

話を戻します。ハガルと、その息子イシュマエルは、アブラハムという正当な系図から、離れる

ことになりました。それは、本来であれば神様の祝福と恵みから離れる、ということの意味しています。しかし、神様は、正当な系図から離れ行く二人を、なお恵みの中に置き、聖別し、「必ずあの子を大きな国民とする」といって祝福されました。この聖書的事実は、とても重要です。と言うのも、神様は、ようするに、複雑なんです。とっても複雑です。

私たちの目から見ると、正しく幸せになる道筋は、一本のように見えます。だから、その道筋を外れたら、もう終わりに思えることもあります。とくに、制度の整った社会では、その傾向が強いかも知れません。進路とかキャリアパスとか出世街道とか、色々な言い方はありますが、往々にして既定路線を進むことを良しとする雰囲気があります。それは、高確率で幸せに至るための知恵ではありますが、でも、私たちの神様は、時にそうした人間の知恵をゆうに超え行くものである、ということ、心の片隅に置いていても損はないでしょう。

社会的弱者に迫いやられても、貧困に置かれても、評価されなくても、虐げられても、報われなくても。諦めなくていい、現状に甘んじなくていい。しっかりと周りを観察して、考えることを続けて。与えられた恵みに、幸せに、次に繋がる好機に気付くことができるなら。多分、今まで「これしかない」と思っていた道とは別の、新しい道、新しい展望が見えてくるというものです。今日の聖書箇所を含め損ねてしまったのですが、続く 19 節には、こう書かれています。「神が、ハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませた」と。この結末は、神様が何か劇的な方法で、人生の危機に介入されるわけではないということを示唆しています。神様は・・・、いや、もっと現実的に言えば、神様への信仰は、人の目を開かせて、今まで見えなかったチャンスに気付かせてくれる、ということです。

主の御名前によって諦めることを知らない生き方。まだ他に道があるに違いないという見通し。

「これで終わりのワケが無い」という根拠不明の確信。どれも大いに結構です。そうやって、次の

手掛かり、次の足掛かりを見つけて、進んでいくこと、生きていくこと。それが、どんな困難においても事態を打開していく信仰の力というものです。これぞ私たちクリスチャンの強みですね。

生きていれば、ドロドロ愛憎劇もあるかも知れない。親しい人と離れ離れになることもあるかも知れない。分かり合えず、喧嘩することもある。それによって深く刻まれた溝を前に後悔することもある、言い過ぎた昔の失言にため息をつくこともある。色々あるかも知れないけれど、それでも、神様は、神様の仕方で、私たちを祝福してください。サラにはサラの、アブラハムにはアブラハムの、イサクにはイサクの、ハガルにはハガルの、イシュマエルにはイシュマエルの、祝福の形がありました。その聖書的事実に私たちは希望と福音を見出しながら、どんなことがあっても決して見捨てられない、信仰の道を歩んで参りましょう。今週も、私たちの想いを超えた、良き道が備えられますように願うものであります。お祈りを致します。

神様。

今日も私たちを、この礼拝堂に招いてくださり、心から感謝致します。あなたは、この世界に人間が生まれた最初の時から、人間のイザコザに寄り添い、助言を与え、御心のままに導いて、それぞれの人生の上に祝福を注いでくださいました。愛のゆえに激情に駆られる人にも、穏やかさのゆえに他者に吞まれる人にも、弱さのゆえに追いやられる人にも、あなたは御心を傾けてくださいます。それは、私たちの想いを超えて、理解を超えて実現される、あなたの深く豊かな慈しみの表れであると信じます。どうか、一生懸命に生きればこそ引き起こされる、様々な人間関係、色々な葛藤、種々の軋轢について、あなたが最も良いと思われる道筋を、幸いに満ちた結末を備えていてください。全能のあなたを信頼し、その信仰を忘れないことで、いつも元気に、感謝して日々の生活を楽しむことができますように。どうかお守り、お導きください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。